

育ち合いの子育て支援活動 ～親子ひろば「はらっぱ」を事例として～

Child Raising Support Activities by Growing up Together

清水 美知子*
Michiko SHIMIZU

抄 録

本稿では、子育て家庭が支え合い、育ち合う子育て支援活動について、兵庫県稲美町の子育てひろば「はらっぱ」を事例にとりあげ考察する。「はらっぱ」は2000年10月、幼児をもつ母親4人により子育てサークルとして発足した。現在はスタッフも30人に増え、稲美町社会福祉協議会に所属する「“子育てをもっと楽しむための活動を企画・運営する”子育てボランティアグループ」として活動している。「はらっぱ」の特徴は、当事者である親自身が主体的に関わり、参加者みんなの思いが集まってできる「場の力」を重視していることで、子どもや親自身の成長を共に喜び合える、育ち合いの場作りをめざしているという。本稿では、「はらっぱ」誕生から今日に至る7年余りの活動を紹介するとともに、子育て支援のあるべき方向性について考える。

1. はじめに

2006（平成18）年初夏、フィールド先であるK市の子育てオープンルームに、学生とともに参加したときのことである。このオープンルームは2003年のスタート時から、シニア世代のボランティアがスタッフとして関わっている。予約が要らない気楽さもあり、開設当初は月2回のオープンルームに数十組の親子が参加し、おおいに賑わったものだった¹⁾。ところが、その日参加していた親子は3組8人。7人いるボランティアも手持ちぶさたの様子であった。

「(参加者が)少ないですね」と筆者がスタッフに声をかけたところ、「今日はとくに少ないのですが、最近はこんな日も珍しくないんですよ」とのこと。「お母さんたちはどこへ行っているんでしょうか？」と尋ねると、「あちこちに似たようなオープンルームができましたからね。お母さん同士が『今日はあっちが行こうか。次はあっちにしようか』と連絡を取り合っているようです」という答えが返ってきた。

2003年7月に「次世代育成支援対策推進法」が制定され、すべてに自治体には次世代育成支援のため

* 関西国際大学人間科学部

の行動計画（10カ年計画）を策定することが義務づけられ、2005年4月からは行動計画がスタートした。そのなかで、子育てひろばや子育てサロン、自治体独自の子育て支援センターなどの施設や活動が急速に増大している。

K市も例外ではない。駅前商店街のビルのワンフロアに開設された市の「子育て相談センター」のなかに、年末年始を除く毎日、親子が自由に集うことができる場（ひろば）が開設されたのをはじめ、公民館でも定期的にオープンルームが開かれるようになり、市民ボランティアがスタッフとして関わっているという。「地域のみんで子育て家庭を支援しよう」という機運は確実に高まりつつある。とはいっても、新たな問題点も浮上してきた。K市子育て支援課の職員は次のように語る。「オープンルームのなかには、親子に来てもらうために過剰なサービスを提供するところもあります。お菓子付き、おもちゃ付き。『あそこに行けばタダでお菓子がもらえる』というような情報はすぐ広まりますから、ワ～ッとそこに人が集まる。面白そうな行事があると、お母さんは携帯電話で連絡をとりあってみんなそちらへ行っちゃう。あちこちのオープンルームを渡り歩いて、美味しそうなサービスをつまみ食いする。親子が集まる場（ひろば）が増えたのは結構なことですが、親たちが与えられることに慣れてしまうようで……。よい傾向とは思えません²⁾」。

「ひろば」はいま、国が最も力を入れている子育て支援事業のひとつである。親子が集まる場が多くできることじたいは結構なことである。しかし、ひろばが量産され、親子にとって居心地のよいサービスの場が提供されれば、それでよいのであろうか。

子育て支援とは、子どもや親が本来持っている自ら育つ力を発揮できる環境を保障することにほかならない³⁾。親子が集まる場が広がることにより、親たちをサービスの受け手にさせ、依存的にさせてしまうのだとすれば、子どもが育ち、親として育っていく、子育て支援の目的に反する。上記のK市職員の声は、支援のあり方によっては、より依存的で未熟な親たちを生み出すことの問題性を指摘しているといえよう。

子育ての「ひろば」とは、一般に、幼い子どもとその親がふらっと立ち寄れる「居場所」のことであり、さまざまな親子が自由に交流を持ったり、気軽におしゃべりをしたり、情報交換ができる場であると理解されている。すなわち、親子を主体とし、親たちが子育て仲間を得て、支え合い、育ち合う関係をつくっていくところに、その特徴と意義があるといえよう。

ひろば型の子育て支援はカナダのドロップイン（drop-in）からヒントを得ており、日本においては21世紀に入る前後から全国的に展開されはじめた⁴⁾。本稿では、育ち合う子育て支援として兵庫県稲美町の子育てボランティアグループ「はらっぱ」の活動を事例にとりあげる。親たちが子育て支援の活動にたずさわるようになった経緯と、活動の内容、そして活動に関わる意識について明らかにするとともに、ひろば型子育て支援のあるべき方向性について考える。

2. 子育てサークル「はらっぱ」の誕生

2.1 子育てママの小さな集まりから

「はらっぱ」は2000年10月、4人の母親が立ち上げた子育てサークルである。実家は遠いし、結婚してから稲美町に引っ越してきたので知り合いもない。夫は仕事で毎日遅くならないと帰ってこない。子どもと二人きりの時間が手持ちぶさたで、用もないのにスーパーに出かけてみたり。そんな母親たちが出会ったのは、稲美町子育て学習センターのサークル「コロボックルの会」である。

子どものなかには、みんなで一緒に体操したり、工作したりするのが好きでない子もいる。親子で一緒に遊ぶ会に行っても、他のことがしたい我が子を無理やり参加させようとして落ち込み、親のほうがしんどくなることもしばしば。もっと自由に遊べる場があればいいのに……。サークルでの1年間の活動を通して親しくなり、自宅や公園に誘ったり誘われたり、いろいろな話で盛り上がり意気投合し、自主サークルとしてスタートした。設立メンバーのひとりCさんは、当時をふり返り次のように語っている。

いつでも集える場所がほしい！でも稲美町にはないね、じゃあ作っちゃおう！という感じで始まった「はらっぱ」。初めはどんな感じか、自分にできるのか、今ひとつピンときてなかつたけど、とりあえず自分がしたいと思うことをしてみようということで「あそぼっ会（水遊び、バーベキューなど家族で楽しめるもの）」や「しゃべろっ会（ゆっくりと語り合う会）」などが始まりました⁵⁾。

メンバー全員が乳児を抱え、子育てに追われる忙しい身の上であったため、活動としてまずは集まっておしゃべりする会を開こうということになり、2000年10月20日、稲美町役場内にあるコミュニティセンターにおいて第1回の会合を開いた。参加したのは7家族で、①月1回の例会を開くこと、②参加費として1回につき100円を徴収すること、③毎月機関誌を発行すること、などを決めた。翌11月にはA4用紙2枚の手書きの機関誌「はらっぱ通信」創刊号を発行した。

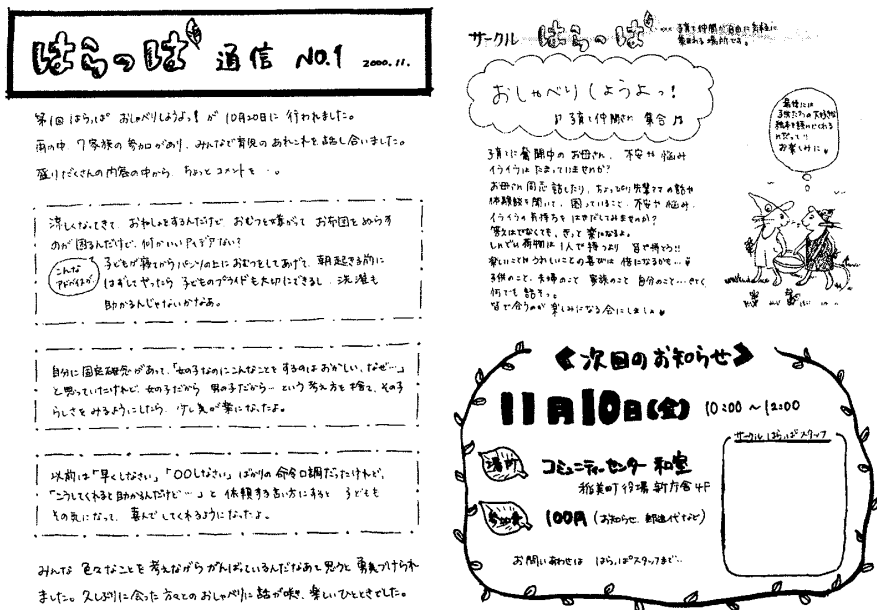


図1 「はらっぱ通信」創刊号

はらっぱ通信では、おしゃべりの会のダイジェストが紹介されるとともに、毎回、参加を呼びかけるメッセージが掲載されている。その一部を引用しておこう。

子育てに奮闘中のお母さん、不安や悩み、イライラはたまっていますか？
お母さん同士話したり、ちょっぴり先輩ママの話や体験談を聞いて、困っていること、不安や悩み・イライラの気持ちをはきだしてみませんか？
答えはでなくても、きっと楽になるよ。
しんどい荷物は1人で持つより、皆で持とう！！
楽しいことやうれしいことの喜びは、倍になるかも…。
子供のこと、夫婦のこと、家族のこと、自分のこと…etc。
何でも話そっ。皆で会うのが楽しみになる回にしましょ。

2001年3月、「はらっぱ」では、母親たちの声を今後のグループ運営に反映させていくために、これまでの例会参加者に対して自由記述によるアンケート調査をおこなった。質問項目は、「Q1 今まではらっぱに参加しての感想」「Q2 今後はどんな活動をしたいですか」「Q3 はらっぱ通信についての感想など」の3つである⁶⁾。

参加者が「参加してよかった」とあげているのは、第一に、何気ない日常会話を通して共感性を得られる点である。たとえば、ある母親は「今自分が悩んでいることとか聞いてみたいこととかについて、メンバーのみなさんや参加された方々に話すことで、とても気分がすっきりするし、自分だけじゃないんだ〜、と思えることはとても大事ですね」と書いている。子育てについての悩みを打ち明けたとき、他者も同じ悩みを経験していることを知るだけで不安が軽減されるのである。第二に、他者の経験との比較を通して、親としての自己覚知を促す点である。「たくさん子どもたちがいて、自分の子と同じ月齢の子、少し上の子がいて、1〜2ヶ月後には(うちの子も)はいはいするんだなあとか、2〜3才の子どもたちのやりとりとか見ていておもしろかったです」「自分の子どもはもちろんですが、友だちの子どもさんも『もうこんなことができるんだ』とか一緒に成長を見ていけるからいいなあと思います」。他の子どもたちの成長を通してすこし先の我が子の成長を予想できる。これは親たちにとって、悩みや不安を軽減するだけでなく、喜びや楽しみを増加させる効果も有している。

アンケートにはまた、おしゃべりの会だけでなく、「温かくなったら公園とかに行けたらいいなあと思います」「たまには外へ出てみたり、何か子どもが楽しめることをしてみたい」「パパたちも参加できるようなバーベキュー、花見、七夕など」といったイベント希望が数多く寄せられた。こうした母親たちの声は、さっそく次年度から導入されることになり、2001年7月には水遊び、8月にはバーベキュー、12月にはクリスマス会、2月には父親も交えての新年会、といった形で実現した。

さらに、「はらっぱ通信」に対しては、「子どもが喜ぶお菓子や料理のメニュー紹介などあったらうれしい」「子どもたちが気に入っているおもちゃや絵本のこどについての記事があればいい」「我が家、我が子のエピソード、体験談などがあるといい」「2ヶ月に一度くらいの割合にして、内容を盛りだくさんにしてもいいかもしれない」などの声が寄せられた。これらの結果にもとづき、「はらっぱ通信」で

は2002年5月号より発行を隔月にしてA4サイズ4面にボリュームアップ。読者からのお便りコーナー(今月のダンボ)を開設するとともに、不定期に料理のレシピ欄やおもちゃ・本の紹介欄なども設けるようになった。そして、会費についても、毎回の例会参加費を無料し、代わりに通信費として半期(3回分)500円を徴収するという方式に変更した。

2.2 おしゃべりからイベントへ

創設から1年半が過ぎ、「はらっぱ」では2002年度より月1回の例会に以外に、土曜日を中心に月1回程度のイベント(家族みんなで思いっきりあそぶ会、のちに「あそぼっ会」)を実施することにした。4月から幼稚園や保育園に入る子たちが増え、子どもたち同士が平日に会ったり遊んだりすることが難しくなったからである。それとともに、働いているなどの理由でふだんの例会には行けないけれどイベントには参加したいというメンバーのために、会費を①はらっぱメンバー(通常の例会とイベントに参加する会員)、②イベント会員(イベントに参加する会員)、③お試し会員(試しに例会に参加してみようという人)の3つに区分し、①は半期500円、②は半期300円、③は1回100円と設定した。

2002年4月には「公園へピクニック」、6月「パパも一緒にバーベキュー」、7月「お弁当をもって水あそび」、8月「夜の公園でカレー作り」「海洋文化センターへ水遊び」、9月「公園で遊ぼう」、10月「けんちん汁をつくろう」「自主グループ運動会」、11月「まきまきクッキングパーティ(クレープと巻き巻きおむすび作り)」、12月「クリスマス会」、1月「パパも参加の新年会」、2月「県立こどもの館へ行こう」、3月「もちよりパーティ」というように、年間13回のイベントを実施している。そのひとつ、8月に42名が参加した「カレー作り I N夜の天満大池公園」のもようを紹介しておこう⁷⁾。

8月3日(土)。お天気にも恵まれ、はらっぱ初の夜のイベントが盛大に行われました。大人18名、子ども24名で楽しいカレー作り! 子供たちが皮むきや野菜きりを手伝ってくれている間にお父さんたちは薪で火おこし。慣れない手つきでみんな一生懸命がんばりました。ワイワイ話してるまに「サマーカレー」と「ビーフカレー」2種類のカレーが出来ました。味はもちろんとってもおいしかったです。サマーカレーに入っているなすびが苦手と言っていたHパパも、“おいしい!”と好き嫌いを克服しました。あとはTパパの提案でM I Xカレーになりました。これがまた大絶賛! コクのある美味しいカレーをたらふく食べました。デザートフルーツポンチもGOODでした。お腹もいっぱいになった後は、もう1つのお楽しみ、花火をしました。色とりどりのきれいな花火と子供たちのうれしそうな笑顔でおひらきになりました。

イベントを取り入れたことで参加者は増え、毎回50~60名にのぼる盛況ぶりであった。また、イベントに父親たちも参加したことから、家族ぐるみでの交流の機会も増加、評判も上々であった。いっぽう、イベントのみに参加するメンバーばかりが増え、おしゃべりの会の参加者が減少する、という問題点も浮上してきた。

2003年1月発行の「はらっぱ通信」には、スタッフの悩みが次のように綴られている。その全文を紹介しておきたい。

11月（例会）はスタッフ2名の他に大人2名のみの参加で、ちょっとさみしい例会になりました。人数も少なかったため、子育て学習センターの先生にもアドバイスをいただきながら、今スタッフのほうで悩んでいるテーマ「今後のはらっぱの活動をどうしていくか」という話になりました。

はらっぱはもともと、子育てのこと、夫婦のこと、自分自身のことなど何でもおしゃべりできる会（例会）をしたいな、ということで始めたサークルで、最初は例会のみで行っていたのですが、上の子たちが幼稚園や保育園に行きはじめて、子どもたち同士で遊ぶ機会が減ってしまうので、親子で楽しめる企画もしようとして『イベント』をはじめました。

現在、イベントの方は口コミでメンバーも増え大盛況なのですが、例会の方は人も少なくなり、また例会に参加してくれている方はイベントの方はなかなか参加できない、という状況が続いています。また、イベントの方は好評で、スタッフとしてもうれしい限りなのですが、なにしろ人数が増えてきて、スタッフ3～4名で月1回のイベントの企画・準備・運営をするのが非常に大変になってきています。

準備に十分な時間をもてないまま当日を迎え、当日も大勢の人数を相手にバタバタと走り回り、自分たちの子どもはほったらかしのまま、何とかこなすものの終わるとぐったり、しばらく何もする気力もおきない、といった感じでなのです。親子で楽しめる企画を…ということでイベントの内容を考えて行っているはずなのに、スタッフは自分の子がどんな顔（表情）をして参加しているのかもわからない（見る余裕がない）。こんな状態でいいのだろうか…。スタッフの間では、このような思いが生まれてきているのです。

例会への参加者が話し合いを重ねた結果、「はらっぱ」のスタッフ4人が稲美町ボランティア協会に登録し、新年度（2003年4月）よりボランティアグループとして活動することとした。①ボランティア協会から活動資金の援助を受けられる。②通信費・コピー代・備品・消耗品などに使う経費が参加者の負担にならない。③例会・イベントに使う会場の便宜をはかってもらえる。④グループの活動をいろいろな人に知ってもらえる、などメリットが大きいと考えたからである。

「子育てサークル」と「子育てボランティアサークル」との活動の違いは、2003年3月発行の「はらっぱ通信」にまとめられている。要約すると、①月1回の例会は「しゃべろっ会」とし、誰でも参加できる形に変える。②イベントは「あそぼっ会」と命名し、回数を月1回から年4回+アルファへと減らす。③イベントの企画・準備は、年間登録した参加者の中で当番を決めスタッフとともにこなす。④「はらっぱ通信」は発行部数を増やして地域の人にも配布する、などがおもな変更点である。

「子育てサークル」から「子育てボランティアグループ」へ――。設立から3年半、「はらっぱ」は新たな一步を踏み出した。

3. 子育てボランティアグループとして

3.1 「しゃべろっ会」と「あそぼっ会」

2003年5月発行の「はらっぱ通信」は、「はらっぱが新しくなりましたよ～！！」という見出しで、「はらっぱ」がリニューアルしたことを伝えた。

子育て仲間が自由に気軽に集まれる場所を、私たちスタッフが必要としてできたはらっぱですが、今回ボランティア協会に登録することで、「子育てをもっと楽しくための活動を企画・準備するグループ【子育てボランティアグループはらっぱ】に生まれかわりました！！」。なんだかちょっとお堅い？イメージになったかもしれませんが、私たちスタッフが知り合えて得られたもの、感じたことを、これから子育ての輪に入っていきたいというお母さんたちに伝えたいと思うのです。スタッフ全員小さな子どもがいるので、行き届かないこともあると思いますが、だからこそ共感しあえる部分があると思います。お互い支えあって、楽しみながら、子どもたちと一緒に成長していきましょう。

自由参加になった月例会「しゃべろっ会」（4月17日開催）には、大人13名、子ども18名の参加があった。町内の小児科や図書館・役場などに通信を置かせてもらったことから、何名かの新規申し込みがあったという。初参加のある母親は、FAXで次のような感想を寄せている。

「多くのお母さんからの意見を聞き、我が子をまだ違う方向から見られるようになった気がします。これから成長していくうえで、悩みはつきもだと思うけれど、今この時を大切に、かわいい我が子と接していきたいと思います。誰もが我が子を一生懸命になって育てているんだというのを、先日のしゃべろっ会で感じ、こういう場でわからないこと、困ったこと、悩んでいることを聞いてもらえるのなら”子育てでなんてなんのその、子育てって楽しいなあ”って思える気になりました」。

従来のイベントは「あそぼっ会」としてリニューアルした。はらっぱでは、2003年5月より隔月で「あそぼっ会通信」の発行をはじめた。すべてをスタッフが準備してメンバーにはいわば“お客さん”として参加してもらうやり方から、メンバーにも一緒に企画・準備してもらうやり方へと転換したことにより、内容をオープンにして、合議制で進める必要が出てきたのである。創刊号には、担当チームと担当するメンバー名とスタッフ名が掲載された。

図2は、2003年7月号の「あそぼっ会通信」である。春チーム「さくらぐらみ」企画の「中央公園で遊ぼう！」には総勢78名（大人30名、子ども48名）が参加した。当日は、5人のチーム担当者がスタッフのサポートを受けながらイベントを運営した。2003年度にはこのほか「焼きそばパーティ&水遊びin三木山森林公園」「運動会」「プレイパーク&焼き芋」「新年会」と計5回の「あそぼっ会」が開催され、いずれも50名以上の参加者をあつめたという。こうした活動を通して、「スタッフと参加者が対等な立場で一緒に『場』を作っていく」というはらっぱの基本方針が定まっていた。

あそぼっ会通信 2003年7月号

春のあそぼっ会活動報告

あそぼっ会がチーム担当制になってから初の企画「中央公園で遊ぼう」が実施されました。今回の担当は西本さん、宮田さん、仲村さん、井上さん、藤本さんの「さくらぐみ」。事前に集まって企画・持ち物の相談をしてくれ、当日は自己紹介担当、遊び（ハンカチ落とし、花いちもんめ）担当、報告記事を書く担当、とそれぞれ担当に分かれて準備してくれました。ご苦労様でした。活動報告の記事を書いていただきましたので紹介します！

5月18日（日） 春チーム「さくらぐみ」企画 春のあそぼっ会「中央公園で遊ぼう！」



みんなでお弁当！おいしいね！



ハンカチ落とし。だれに落とそうかな

心配されたお天気も何とかもち、「春のあそぼっ会、中央公園で遊ぼう！」を開催しました。当日の参加者は大人30名、子ども48名で合計78名とまるで幼稚園の1クラス分以上いるのでは！？という人数でした。
 全員集合を待ってのお弁当タイム。もうひと遊びしておなかがいっぱいの子どもたちはお弁当をむしゃむしゃパクパク、そして父・母は食事しながら自己紹介。
 午後は思い通りの遊びをしつつ、「ハンカチ落とし」「だるまさんがころんだ」をして遊びました。各遊びともルールを理解するのに多少時間はかかりましたが、子どもはもちろん母もワン年齢？いやいやワン十年前の子どもに戻り、親子一緒に十分楽しめたと思います。が、しかし、父上の参加が0だったのはなぜでしょうか？やる気はあるが体が…の世界？いやいやそんなことは…やはり照れ？いやいや…次回またチャンスがあれば率先してやってみてくださいね。「勝ってうれしい…」の歌が頭の中をぐるぐる回って離れないことうけあいです。そんな感じでその後解散となりましたが、皆さん楽しんでいただけましたでしょうか？
 (藤本)

次回は夏組「ちちだま」チームの「焼きそばパーティー&水遊び」です。お楽しみに！ちちだまさんよろしくお願ひします！（くわしいお知らせは裏面をご覧ください）

図2 「あそぼっ会通信」第2号

さらに、2005年度に入ると、「あそぼっ会」は、火や水、木、土といった自然の素材とそこにあるものを使って自由に遊ぶプレイパークの活動へとシフトしていく。はらっぱでは、2003年11月より数回にわたり、「冒険ひろば あかしっこ」のプレイリーダーを招いて「出前ひろば」を開いてきた。あれダメ、これダメという禁止事項をできる限り廃して、自然のなかでのびのびと遊ぶ。この企画が好評を呼んだため、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、はらっぱ独自のプレイパークを「あそぼっ会」の中心に据えていこうということになったのである。

「はらっぱーく」と命名されたプレイパークのパンフレットには、次のように紹介されている。

「遊びといってもさまざまであり遊具を使ったり、工作をしたりゲームをすることもあれば、名前をつけられない遊びや壊す行為や何もしないという『遊び』さえもあります。子どもの『やりたい!』という気持ちが遊びのはじまりです。いつ来ても、いつ帰ってもOK！ 子供が遊びをつくる遊び場。子どもが主役の遊び場。それが『はらっぱーく』です⁸⁾」。

3.2 多様な人たちを巻き込んで

2004年度に入ると、「はらっぱ通信」は毎号ワープロ打ちとなり、レイアウトも洗練されたものとなった。「開設当初からあそぼっ会（イベント）にずっと参加してくれてきた人がスタッフとして加わりその方面に明るい人がいたから」という。前年までの6人から12人へ。スタッフの増加に支えられ、はらっぱは新たな活動に乗り出すことになる。以下では、特筆すべき活動を3つにしばって紹介しておきたい。

①「ぼっかぼっかくらぶ」の発足

特筆すべき活動のひとつ目は、0～2歳ぐらいまでの赤ちゃんとその母親を対象とした会を立ち上げたことである。しゃべろっ会の参加者に乳児を連れた母親が増えてきたことから、対象を限定した会を開いたのだという。2004年5月発行の「はらっぱ通信」には、「はらっぱのBabyたち、集まれ～!!」という見出しで、次のような呼びかけ文が掲載された。

お待たせしました！はらっぱ「赤ちゃんの会（仮称）」をスタートしたいと思っています。0歳，1歳のころは，赤ちゃんも親も初めてのことでドキドキがいっぱい。おっぱい，夜泣き，しっしん，離乳食…etc。お互い誰かに聞きたいことが一番多い時期ですよ。ちょっと集まって，おしゃべりするだけで，リラックスタイムになればいいと思っています。ふれあい遊びやわらべうた，絵本など，赤ちゃんとどうやって遊ぶの？！って思っている人も一緒に楽しみませんか？Babyたちと，ほっこり，ゆったりTimeがつけれるといいナ…！？0歳児，1歳児限定にしたいと思いますが，興味のある方はぜひぜひご連絡ください。

翌6月，赤ちゃんの会には大人10人，子ども8人の参加があり，会の名称を「ぼっかぼかくらぶ」とすることに決めた。参加したある母親は，次のような感想を述べている。

『育児はしんどい』。私にとって初めての子育てで，最初はそんな感覚しかありませんでした。ぼっかぼかに参加して娘と同じくらいの子どもの持つママと話していると，同じような悩みを持ち共感することが多いのに，楽しみながら育児をしているなど感じる人が多いのです。とてもいい顔！をしているのです。ママも子どもも…ん？何で？夜泣き，離乳食，病気，事故対策，予防接種…etc。悩みを挙げればキリがありません。ママ達の話は育児の悩み事。しかし子どもの成長の話になると，皆，笑顔で語っています。確かにこの場で悩みを相談して100%解決するわけではありません。でも気持ちがラクになれます。苦労も喜びも分かち合うことができます。陽だまりのようなママ達の笑顔とほのぼのとした子ども達のしぐさ。まさに「ぼっかぼか」した癒された気分になれるのです。育児は自分も成長できる育自なんだと気がつきました⁹⁾。

「ぼっかぼかくらぶ」ではその後，おしゃべりの会だけでなく，「ベビーマッサージ講習会」や託児付きの「スリング（新生児から使える抱っこひも）を作る会」，「お茶会」などを開催するなど，活動の幅を広げている。



図3 「ぼっかぼかくらぶ」の様子

②「トライやるウィーク」中学生の受け入れ

特筆すべき活動のふたつ目は，「トライやるウィーク」の中学生受け入れである。トライやるウィークは，兵庫県の公立中学の2年生が授業の一環として5日間，学外の団体・施設などで職業体験をおこなうもの。ボランティア協会の依頼を受け，5月末から6月初めにかけて地元・稲美北中学校の女子生徒3人を受け入れることになった。

表1は、「トライやるウィーク」5日間のスケジュールと役割分担を示したものである。「しゃべろっ会」「はらっぱ通信」「プレイパーク」「ぼっかぼかくらぶ」など、はらっぱの主だった活動に中学生たちを関わらせ、参加させる工夫がなされている。「はらっぱ通信」に掲載された中学生たちの感想文の一部を引用しておこう¹⁰⁾。

- ◆小さな子はいろんなおもちゃで、私が思いつかないような遊び方をしておどろきました。時間が過ぎていくのがわからないくらい、いろんなことをさせてもらっていて、とても楽しかったです。しゃべろっ会では、子育てをしていく中で子供がするはずらについての話や、心配に思っていることや、成長していく様子について話していました。私は子育ては大変だなと思ったけど、きいていて面白かったです。【1日目：しゃべろっ会】
- ◆最初はどうなのかなあ、と思っていたけどとても面白かったです。ダンボールで家を作ったり泥遊びをして楽しかったです。とても暑かったです。泥のケーキも作りました。とても楽しかったです。ハンモックもありました。【2日目：プレイパーク】
- ◆ダンボールで人が入るぐらいの家を作りました。私たち中学生グループは、少し変(?)な形の家を作りました。うさぎの窓、たこの窓やらハートの「とって」がついたドアなどがついています。中に子供達が入って家がおれたり…というハプニングもあったけど、一生に手伝ってくれたから、すごくはかどりました。今日も時間が早くたっていった気がします。とても楽しい時間がすごせたと思います。【3日目：子育てフェスタの準備】

「はらっぱ通信」にはまた、以下のようなスタッフからのメッセージも記されている¹¹⁾。これらを読むと、母親たちも中学生たちから学ぶところが大きかったことがうかがえる。

- ◆とってもまっすぐで正直な姿に感動しました。母になると子どもとまっすぐに向き合って遊ぶ事が少なくなっているので、私のほうが教えられる事が多くありました。このままいろんな事をプラスに変えて素敵な女性になってね。
- ◆いろんな準備をスタッフと話し合い準備を進めてきて楽しみにしていました。一週間はあっという間でした。自分の子も、何年後かしらこんなふうに笑うのかなあ、というふうに見ていました。こんなふうな子になってくれると嬉しいな~と思いました。
- ◆フェスタのお家づくりを一緒にしていて、発想が柔軟で若いってうらやましいなって思いました。楽しかったです。ありがとう。
- ◆何かを作ったりって学生のと看頼で楽しかったです。トライやるは、中学生が社会に触れあい学び、私たち大人も中学生の子達から何かを学ぶ良い機会だったように思います。

はらっぱでは、その後も毎年3~4名の中学生を受け入れている。トライやるウィークの修了生が、土日や夏休みに開かれるイベント(プレイパークなど)に参加することもあり、交流が続いているという。

育ち合いの子育て支援活動

表1 2004年度「トライやるウィーク」行程表

	9:00	午前	12:00	午後	15:00
5/31(月)	準備	しゃべろっ会 10:00~11:30 いきがい創造センター ホール	昼食	ふりかえり いきがい創造センター ホール	
中学生にや ってもら 内容	会場設営 お茶の用意 受付	10:00~10:30 1班 記録と託児の両方を 10:30~11:00 2班 体験してもらう 11:00~11:30 フリータイム(お茶タイム) 11:30~ 片付け		自己紹介・しゃべろっ会の感想 はらっぱの紹介(なぜ必要なのか・活動内容) 【4日午後の出し物(紙芝居・絵本・手遊びなど)の練習】 本日の感想(毎日少しずつ書いてもらう)	
準備物	名札・マット・おもちゃ・通信 お茶セット⇒安藤			はらっぱ通信・チラシ・写真など⇒演田 お茶セット⇒安藤 感想の紙(中学生に書いてもらうもの)⇒演田 絵本・紙芝居など⇒川島	
参加スタッフ	演田・川島・井上・塚・林・藤田・安藤・尾崎・佐々木・原 島津			井上(司会)・川島・林・藤田・原・島津 安藤(～2:00)・演田(～2:00)・塚(～2:30) 尾崎(～2:45)・佐々木(～)・西本(～)	
参加中学生					
6/1(火)	準備	プレイパーク 10:00~12:00 中央公園(雨天 コミセンホール)	昼食	ふりかえり(プレイリーダーさんの話) 中央公園ら コミセンホール	
中学生にや ってもら 内容	プレイパーク 準備	小さい子どもとお母さん向けのプレイパーク		・中学生とスタッフでグループに分かれ、グループごとに遊 びを考えるワークショップ ・プレイパークについて(プレイリーダーさんの話) ・本日の感想	
準備物	ダンボール・ぶちぶち・紙筒・ブルーシート・竹 →安藤 演田・安藤取りに行く	竹 林取りに行く		ダンボール・ぶちぶち・紙筒・竹・ブルーシート・ラインテ ープ お茶セット⇒安藤 感想の紙(中学生に書いてもらうもの)⇒演田	
参加スタッフ	演田・川島・井上・林・安藤・尾崎・塚(11:30~)・佐々木			演田・川島・林・安藤(～2:00)・尾崎(～2:45) 塚(～2:00)・井上	
参加中学生					

6/2(水)	準備	子育てフェスタの準備 障害者ふれあいセンター 多目的室	昼食	通信づくり 障害者ふれあいセンター 多目的室	
中学生にや ってもら 内容	材料の運び込 み 会場設営	ダンボールのおうち作り スタッフの子どもたちと遊んでもらう		通信づくり(記事作成) 【4日午後の出し物(紙芝居・絵本・手遊びなど)の練習】 本日の感想 3日用のおもちゃを選ぶ	
準備物	ダンボール・ぶちぶち・紙筒・竹・ブルーシート・包装紙・新聞 紙・広告 折り紙・ガムテープ・ラインテープ・ボンド・のり・クレヨン ⇒賣出し(キヤ) など			今までの通信見本⇒演田 記事を書いてもらう紙 お茶セット⇒安藤 絵本・紙芝居など⇒川島 感想の紙(中学生に書いてもらうもの)⇒演田	
参加スタッフ	演田・塚・藤田・林・安藤・井上・上田・貴伝名・増田			塚・演田・井上・林(2:00)・安藤	
参加中学生					
6/3(木)	準備	赤ちゃんの会とのふれあい10:00~11:30 総合福祉会館和室	昼食	ふりかえり 総合福祉会館 和室	
中学生にや ってもら 内容	会場設営 テーマを紙に 書く おもちゃ	①自己紹介・近況報告・悩み・親ばかタイム・生ま れたときのこと・名前の由来・子どもへの思い (出産の時の話) ②ふれあいタイム(かたもみ) ③手遊びタイム 機会があればおむつ替え・ミルク		・赤ちゃんの会に参加しての感想 ・スタッフも聞こう! ・お産の話・子どもの小さいころの話・自分の小さい頃の 話・小さい頃の写真を持ってきてもらいたい ・機会があればおむつ替え・ミルク ・本日の感想	
準備物	機造紙(カレンダーの裏)・マジック⇒藤田 話をする話題の内容⇒島津 赤ちゃん向けおもちゃ			ミルク・おむつ・写真 お茶セット⇒安藤 感想の紙(中学生に書いてもらうもの)⇒演田	
参加スタッフ	藤田(進行)・島津(手遊び)・原(贈り物)・川島			藤田(2:00)・島津・原・川島・演田(12:00~)・林 井上(12:00~)	
参加中学生					

6/4(金)	準備	子育てフェスタ(子育て学習センター主催) 10:00~人形劇 11:00~遊びのコーナー	昼食	全体のふりかえり&中学生へのメッセージ 打ち上げ! いきがい創造センターホール	
中学生にや ってもら 内容	ダンボールの おうちの運び 込み	遊びのコーナー担当 子どもたちと一緒にあそんでもらう		・お菓子とジュースを囲みつつ、全体の反省会 ・一週間を通しての感想 ・中学生にだし物(紙芝居・絵本・手遊びなど)をしてもら う ・中学生へ色紙を渡す(スタッフから中学生へ) ・本日の感想	
準備物	ダンボールのおうち・ダンボール・(念のためぶちぶち)			お菓子・ジュース⇒賣出し 藤田 お茶セット⇒安藤 絵本・紙芝居など⇒川島 色紙(中学生に渡すもの)⇒演田 感想の紙(中学生に書いてもらうもの)⇒演田	
参加スタッフ	演田・林・藤田・安藤(貴伝名)・島津 (井上・塚)			演田・林・藤田・安藤・井上・塚・川島・原・尾崎・佐々木・ 貴伝名・増田・田淵・島津	
参加中学生					

③「ダンディーズくらぶ」の誕生

特筆すべき活動の3つ目は、父親たちの親睦会「ダンディーズくらぶ」の発足である。すでに土曜日に開かれるイベントには、父親も含めた家族ぐるみで参加することも少なくなかった。それを一歩進めて、正式に父親たちの会を立ち上げ、父親たちも積極的に活動に関わるようになったのである。2004年11月発行の「はらっぱ通信」には、「ダンディーズくらぶ」第1回会合のもようが掲載されている。その一部を引用しておきたい。

10月16日（土）に第1回はらっぱ父だけの親睦会をTさん（はらっぱ会員）のご主人経営の居酒屋「たから」さんで行いました。この会は、父の親睦を深めることはもちろんですが、何よりも妻のため、こどものためにという強い思いから父たちが立ち上がったのです。／今回は急なこともあり、参加人数は7名と少なかったんですが、盛り上がり三次会まで行き、最後はラーメンで締めくくりました。「えっ！普段はおとなしいあの父が…。はじめてましたよ～〇〇父の奥さん！！」。これ以上は本人から直接聞いてください。／その他の話題については皆さんの想像にお任せするとして…。参加した父たちからは「積み立てして定期的にしよか…。」とか、「ああ～、どないしょう小遣い～…。」という声がおかあちゃんの恐い顔が浮かんだ父もいたようで…。皆さんの懐事情お察しします。／ということで、この会はたいへんお気楽な会ですので、次回開催する時にはたくさんの父の参加をお待ちしています。

この日の会合で、2004年10月31日に開催される稲美町ボランティア協会主催のフェスタにおいて、父親たちが「おでん」の模擬店を出すことに決まった。そして当日。ダンディーズくらぶのおでんは大好評で即座に完売。売上金の一部ははらっぱ活動資金に寄付され、残りは第二回親睦会の軍資金になったという。「ダンディーズくらぶ」はその後、あそぼっ会でも活躍、フェスタの模擬店や飲みのみならず、「どろんこバレー」に出場するなど少しずつ活動の幅を広げていった。



図4 「ダンディーズくらぶ」の父親たち

「ダンディーズくらぶ」メンバーのある父親は、2005年10月、はらっぱ設立5周年にあたり、次のようなメッセージを寄せている。「最初は妻に連れられ、初対面のH家に不安を抱きながらフリマに参加。

今思えば、私の人生のなかで劇的な出会いとなりました。その後、同級生のF家との再会もあり、私の宝物になる出会いが続きました。／ふり返って5年、私にとっても家族にとっても、宝物の出会いが宝物の思い出をつくってくれました。日常いろんなおつきあいがある中で、はらっぱのメンバーとの関係においては不思議な感覚があり、時間をおいて出会っても、構えたり、照れたりすることなく自然体で接する事ができ、また受け入れられているように感じます¹²⁾」。

4. おわりに

4.1 8年目に入った「はらっぱ」

2007年10月、「はらっぱ」は設立から8年目を迎えた。現在のスタッフは30人。月に一度、活動の報告や反省、今後の活動についてみんなで話あるという方式をとっている。主な活動内容は次のとおりである。

【しゃべろっ会】月1回の定例会にくわえ、「ワーキングママのしゃべろっ会」「小学生ママのしゃべろっ会」など、子どもの成長や母親たちの生活の変化に応じて、対象を特化した会も不定期におこなっている。

【ぼっかばくくらぶ】月1回実施。0歳から2歳までの子をもつ母親がスタッフとして運営している。赤ちゃんと母親たちが集まっておしゃべりしたり、ふれあい遊びをしたりと、ほっこりゆったりタイムを過ごしている。毎回新しい参加者があり人気が高い。

【あそぼっ会】年4～5回。「自分の責任で自由」に遊ぶをモットーにしたプレイパークをはらっぱ流にアレンジした「はらっぱーく」を中心に活動を展開している。

【はらっぱ通信の発行】2か月に1回。活動報告や会員からのおすすめ情報、活動案内などを掲載した通信紙を発行。記事はできるだけ多くの人に書いてもらい、集まった記事はその号の当番スタッフがまとめて通信の形に仕上げている。自宅へ送って欲しい人には切手をもって送付。役場や図書館、小児科、銀行、福祉会館などにも置いている。

【小さな子どもたちとお母さんのためのおはなし会】月1回。図書館にて実施。「お母さん自身も絵本の世界を愉しんでみませんか」と呼びかけ、ふだん家で自分の子に読んでいるのと同じように、いろいろな母親たちが絵本の読み聞かせをしている。

【はじめての絵本運動】2か月に1回。町からの養成でボランティアとして協力している事業である。4か月検診で、赤ちゃんやお母さんに絵本の読み聞かせをし、おすすめ絵本リスト、赤ちゃん自身の名前で作られた図書カード、地域の子育て支援情報などを渡す。

【その他の活動・イベント】

- ・ホームページ開設
- ・スタッフ主導型のイベント。不定期に開催。

例)「どろんこバレーボール大会に出よう」、親子栄養教室、ドッジボール大会

ダンディーズくらぶ主催「お父さんだけの親睦会」、V協力フェスタ「おでん屋」

育ち合いの子育て支援活動

ぽっかぽかくらぶ主催「スリングを作ってみませんか」

トライやるウィークで中学生受け入れ

- ・ 託児サポーター養成講座
- ・ 稲美町子育てひろば合同企画への参加

2007年12月11日、「はらっぱ」メンバー6人と乳児2人を、筆者が担当する科目（地域社会論）に特別講師として迎えた。「地域社会論」では2007年度，“子育て支援”をテーマに授業を進めている。子育て中の母親たちのナマの声を通して、①子どもを育てることの喜びや大変さ、②子育てに“支援”が必要である理由、③子育てにおける仲間との交流の重要性、などについて理解を深めることが特別授業のねらいであった。メンバーたちには、タイムスケジュールを伝えるさい、自分の言葉で語ってほしいとだけ依頼し、内容についてはあえて注文はつけなかった。

授業当日。母親たちが入室すると、受講生たちの目は赤ちゃんに釘付け。授業は、母親それぞれが自校紹介を兼ね、子育ての経験談を披露してもらうことからスタートした。子連れ講師のひとり、Sさんがマイクを持って不妊の経験、死産や流産の経験を語っているとき、息子のHくん（6か月）がぐずりはじめ、とうとう泣き出した。すると、「これはね。私に抱っこしてほしいって意思表示なんです。死産・流産をへてやっと授かったこの子のいのちは、私にとって奇跡といってもよい。私たちの命は奇跡なんです」とSさん。Hくんはお母さんの腕に抱かれると泣きやみ、まもなく寝入ってしまった。

「はらっぱ」の活動紹介のあと10分間の休憩タイム。「あれ？ ちょっと臭いよ！」。もう一人の乳児Kちゃん（11か月）がウンチをしたのである。「大量だね～！！」などといいながら、教壇のうえでオムツを替える母親たちを、受講生たちが固唾をのんで見守るというハプニングもあった。休憩のあとは質疑応答の時間。「子育てで多呂利にしているのは誰ですか？」という質問には、母親全員が「第一に夫、そして『はらっぱ』の仲間たち」をあげたのが心に残った。

授業を受けた学生たちは、母親たちのナマの声を聴いてどのように感じたのであろうか。受講生たちの感想文からその一部を引用しておこう。

- ◆子どもは親だけでは育てない。一つの価値観の中で育てるのではなく、いろいろな人との関わりの中で育てる」という話がとても印象に残りました。納得させられました。私も将来子どもを育てる時期が来たら、自分の価値観を押しつけるのではなく、いろいろな人と触れあわせ、その子自身の価値観を広めさせてあげたいです。
- ◆「自分が落ち込んだ時に、子どもが励ましてくれて、その姿を見たときに子どもの成長を感じた」という話を聴いて、子育てをしていく中で親自身も子どもから多くのことを学んでいるんだな、と思いました。子育ては、親が子どもを育てるだけだなく、子どもも親を育てる。お互い成長して高め合うことができるものであることがわかりました。
- ◆子育てには親だけで解決できない多く、誰かの支えが必要であることが改めて確認できました。私も子どもを授かることができたなら、はらっぱのような会に参加したり、ママ友をつくって「幸せ」「辛さ」をともに分かち合いたいです。

- ◆印象に残っているのは、「立派な親になろうと力んではいけない」という話です。自分をしっかり持ち、自分を責めすぎではいけないですね。いろいろな人の協力を得て、さまざまな考え方や愛情に触れながら子どもを育ていくことが良いことなのだと改めて思いました。
- ◆「私たちの命は奇跡である」という言葉を聴いて心を揺さぶられました。わたしが今、こうして生きているのは、笑っているのは、奇跡であることを覚えておきたい。

子育て真っ最中の親ならではの言葉の重み。等身大の母親が語る経験は、書物やVTRからは決して得られない圧倒的な説得力をもって、学生たちに受け入れられたようである。将来、父親・母親になっていくであろう受講生にとって、貴重な親学習の場になったにちがいない。

4. 2 ひろば型子育て支援の課題と方向性

4人の母親でスタートした子育てサークル「はらっぱ」は、多くの母親をメンバーに迎え、父親や地元の中学生も巻き込んで、しだいに子育て支援団体としての性格を強めてきたといえよう。パンフレットやホームページの中でも明記されているが、「はらっぱ」のポリシーともいえる「大事にしていること」は2つある。

第一は、「当事者である子育て真っ最中の母親自身が“主体的に関わる”こと」である。自分のやりたいことを自分たちでやってみる、子ども抱えながら自分たちでするのは大変だが、その中から得るものの多い。子育て中だからできないではなく、子育て中だからこそできることを、周りの人たちの力を借りたり、お互いに助け合ったりしながらやっという姿勢が、そこには感じられる。

第二は、「参加者みんなの思いが集まってできる“場の力”を大切にしていること」である。誰かに「正しい子育て」を教えてもらうのではなく、子育て真っ最中の母親同士で話し、自分で悩み、試行錯誤し、我が子と向き合う中でみえてくるものがたくさんある。あんな子もいる、こんな子もいる、あんなやり方もある、こんなやり方もある——いろいろな子どもや親と出会う場、自分の思いを自分の言葉で語れる場、子どもたちや自分自身の成長をともに喜び合える仲間づくりの場。そんな場所づくりを目指しているのである。

稲美町においても「ひろば事業」が進み、ここ4～5年のあいだに子どもを連れて出られる場が増えた。「はらっぱ」代表Hさんは、自らひろばを開設している者のひとりとして、このような状況について、「他のひろばに参加することで、自分の子どもだけに関われる時間をもてることに非常に感謝している」いっぽうで、「行くだけで楽しい時間を用意してもらうことを当たり前と感じ、毎日のスケジュールをひろばめぐりでうめていく母親達もいることをみると、これが本当の子育て支援だろうかという疑問も感じる」という。

少子化が加速度的に進み、子育ての大変さが強調されるなかで、ともすれば親を「弱者」扱いする傾向が高まっている。子育て中の親を弱者と見ることで、支援者の「してあげる」「やってあげる」という一方通行の援助や指導的な態度が強化され、Hさんが指摘するように、親たちの依存的傾向を高めている場合も少なくないのである。

拙論の「はじめに」でも述べたように、子育て支援とは、子どもや親が本来持っている自ら育つ力を

発揮できる環境を保証することである。ひろば型子育て支援活動において親のエンパワメントを促すためには、そこにやってくる親たちが自ら問題解決をはかれるように支えること、そして、親たちがひろばの活動に主体的に関わることによって、自分のためだけでなく、他の親子のために能力を発揮できる機会をつくりだしていくことも重要である。その意味で、「はらっぱ」の活動は、目指すべき子育て支援の理念に近いものといえよう。最後に、「はらっぱ」代表Hさんの言葉を引用しておきたい。

「活動をしていると、いろいろな得意分野をもったお母さんたちとの出会いがあります。自分にできることならお手伝いしてもいいという人もいますし、積極的に社会とのつながりを求めて活動したいという人もいます。当事者である親たちが力を発揮できるような、育ち合えるような子育て支援とは何か、私たちはもっと考えていかねばならないのではないのでしょうか¹³⁾」。

附記

本稿は、平成19年度関西国際大学カウンセリング研究所プロジェクト研究補助金（研究課題名：地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究～"育ち合う"関係をめざして）による研究成果の一部です。子育てボランティアグループ「はらっぱ」スタッフの皆様には、資料を提供いただくなど、大変お世話になりました。あつく御礼を申し上げます。

注および引用文献

- 1) 清水美知子「シニア世代による子育て支援の実践～加古川市「にこにこオープンルーム」を事例として」『関西国際大学研究紀要 第7号』2006年3月
- 2) K市子育て相談センター職員からの聞き取りによる。
- 3) 山内昭道監修『子育て支援用語集』同文書院、2005年、4頁。
- 4) カナダのドロップ・インについては、小出まみ『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房、1999年に詳しい。2005年現在、日本では厚生労働省が後援する集いの広場事業絡協議会に登録しているだけでも約500カ所の「ひろば」があるという。
- 5) はらっぱ編『はらっぱ5歳になりました：5周年記念誌』、2005年10月、35頁。
- 6) 同上、32頁。
- 7) 「はらっぱ通信」No.13、2002年9月号
- 8) 「はらっぱ通信」No.17、2003年5月号
- 9) 「はらっぱ通信」2004年7月号
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 「はらっぱ通信」2007年1月号・3月号・5月号・7月号・9月号・11月号による。
- 13) 「はらっぱ」代表Hさんへの聞き取り調査による。

Abstract

In this paper, child raising activities in which families raising children support each other and grow up together are considered, taking *Harappa*, a place for parents and children at Inami Town in Hyogo Prefecture as a case study. *Harappa* was started as a child raising group by 4 mothers with infants in October, 2000. The number of the staff has increased to 30, and it works as a child raising volunteer group belonging to the social welfare council of Inami Town, and engages in "planning and managing of the activities to find more joy in child raising." *Harappa* is characterized in that parents themselves are actively involved in its activities and that a high value is placed on "the power of the place" created by the combined feelings of all the participants. They say they aim to create a place where they can grow up together, and all of them can share joy in the growth of not only the children but the parents themselves. This paper details 7 year's activities of *Harappa* from its origin to the present as well as considers which direction child raising support should go.